

写真展

「中国の鵜飼—卯田宗平フォトコレクションから」

日時：2018年9月5日(水)～11月5日(月)  
場所：岐阜市長良川うかいミュージアム特別展示室  
主催：岐阜市長良川鵜飼伝承館  
共催：国立民族学博物館



鵜飼とは、魚食性の鳥類であるウミウ(ウミウヤカワウ)を使った漁法である。ただ、ひとことで鵜飼といってもその技術に大きな違いがある。

日本の鵜飼では、おもに茨城県日立市で捕獲された野生のウミウが利用されている。各地の鵜匠たちは、日立市から送られてきたウミウを飼ひ慣らしている。一方、中国では、漁師が繁殖させたカワウを利用して、このほか、中国の鵜飼はいまでも生業として続けられていることや手縄を使用しないことなどの特徴もある。

このたび、岐阜県長良川うかいミュージアムにおいて、中国の鵜飼に関わる写真展を開催した。写真展では、卯田宗平(本館准教授)が中国各地で撮影した鵜飼にかかわる約32,000点の写真のなかから「中国各地の鵜飼の風景」や「カワウの繁殖技術」、「一日の操業のようす」にかかわる写真を選びだし、日本の鵜飼とは大きく異なる中国の鵜飼を紹介した。このほか、岐阜市民講座「中国の鵜飼について」も開催し、満員の参加者と鵜飼文化の今後について話しあった。写真展を通して、市民の方々に中国の鵜飼の姿を理解する機会を提供できた。

国際シンポジウム

「フィジー諸語と地理情報システム、および博物館展示への応用」およびサテライト・ワークショップ

日時：2018年9月18日(火)～21日(金)、シンポジウムは20日(木)  
場所：国立民族学博物館  
後援：日本言語学会、日本歴史言語学会、日本オセアニア学会  
協力：日本財団助成国立民族学博物館手話言語学研究部門(みんぱく手話部門)

本シンポジウムは、国際学際共同研究「地理情報システム(GIS)を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」(研究代表者：菊澤律子本館准教授、期間：2017年4月から2019年3月、りそなアジア・オセアニア財団助成事業)の研究結果公開の一環として開催したものである。この共同研究は、フィジー語に関わる300あまりの地域変種のデータを地図情報と組み合わせ、通時・共時両側面から言語分析を行うためのツールを開発し、実際の分析を進めるプロジェクトである。日本とフィジー、ニュージーランドの言語学、地理学、統計学、文化人類学を専門とする研究者が通常メールでのやりとりを通して分析を進めている。サテライト・ワークショップでは、メンバー全員がはじめて直接、顔を合わせる機会となり、分析の方法および進行状況を全員で確認・共有し、今後の研究の進め方について議論した。また、公開シンポジウムでは、フィジーの言語に関する現状、GISを利用する意義と見通し、博物館における研究成果の活用について報告を行った。次回は、2019年3月末にフィジーの南太平洋大学で同様のワークショップおよびシンポジウムを行い、今後につなげる予定である。



「北東アジアにおける地域構造の変容—越境から考察する共生への道」会議の様子。

「北東アジアにおける地域構造の変容—越境から考察する共生への道」

日時：2018年9月22日(土)～23日(日)  
場所：国立民族学博物館  
主催：NIHU基幹研究プロジェクトネットワーク型「北東アジア地域研究」



今回の国際会議は、文化、経済、政治、環境などから北東アジアをとらえることによって、地域の全体像を把握し、人類の共生の方法を模索することを目的とした(参加者73名)。

今回の会議では、まず文化を長期と短期という2つの時間スケールに分け、前者に関しては人やものの移動からみた先史時代から現在までの文化史(①民博拠点)、後者に関しては近代化にともなう思想や文化の歴史的な変化(②島根県立大拠点)に焦点をおいた。また、経済の分野では、おもに森林資源を対象とし、森林産物をめぐる国際貿易を検討した(③富山大拠点)。国際関係の分野では、中国と韓国、日本をおもな対象とし、国家の枠組みにとらわれないサブ地域を単位とする研究視角が重視された(④北海道大拠点、⑤早稲田大拠点)。最後に、近年の環境問題に関しては、地球温暖化と排出ガスとの関係、炭素税といった新たな法律の試みが紹介された(⑥東北大拠点)。

これまでの北東アジア地域では、政治経済を中心として国家単位での議論が中心になされてきた。これに対して今回の会議では、国家以外の単位で、とりわけ文化的側面を重視し、時間軸を長期と短期に分けることで地域をより総合的・動態的に把握することに成功した。